

短期集中C型の



みんなで考えよう well-being ⑧

ともひろ

TRAPE 代表 CWD／作業療法士 鎌田大啓

本人のストーリーに合う地域資源 と出会うための短期集中サービス

体で社会と再接続するというストーリーにはならないことが多いわけです。そして無理矢理卒業させられた印象になることが多いように思います。

我々が新しく作った短期集中サービスは「元の日常を取り戻す」がテーマです。疾病、疾病後の後遺症（障がい）、社会とのつながりが少なくなる、自分にとって意味のある役割を喪失する、気持ちが下がる、加齢によって体力が低下する、生活が不活発な状況になるなど、様々な理由で高齢期の方々は日常生活に不自由さを感じてしまい、意図せず自分らしいウェルビーイングな日常ではなくなってしまうのです。

そのような人たちが短期集中サービスを受けることによって再び「自信」「社会的スキル」「つながり」などを取り戻すというものです。

どのタイミングで相談するか

では、どのタイミングで包括や行政へ相談に行けばよいかなと言えは、普段あたり前のようにしていた日常生活活動の回数が減った瞬間です。

最初本人は活動回数が減ったことについて、いろいろな理由を述べ、本当のところは分からないのです。しかし、周囲が気になる日常生活活動の実際の実行回数をカウントすることで、傾向を掴むことができます。放っておかず、家族だけで考え込まず、出来るだけ早く包括や行政へ相談に行くことで、短期集中C型サービスにつないでもらいやすくなります。

本人の自己選択・自己決定を後押しする専門性

自分が自分にとっての日常を自己選択・自己決定することにあると思います。この決定を後押しすることが医療・介護専門職の役割であり、間違ってもその自己選択・自己決定を専門職視点の既定路線に戻すことなどあってはならないのです。

サービス開始当初から地域資源のイメージを膨らませる

このためにはサービス開始時から、どのような地域資源と再接続することが本人にとっての元の日常なのかについて、医療・介護専門職がチームとなって本人とともに想定し始めることが大切です。

を重ねていくことが重要なのです。対話を重ねていくことによって自分の思いをアウトプットしさまざまな視点で整理・解釈する機会が生まれ、自分での自分のあり方について具体的にReデザインする（セルフマネジメント）きっかけとなるわけです。

本人が短期集中サービスを活用して自信が生まれ、考え方や行動の幅が広がっていくほどに、欲する地域資源が多様に変化していくのも特徴的です。

生活支援コーディネーター（SC）の大切さ

地域資源（地域アセット）には、人的資源（本人・家族・医療・介護専門職・住民・ボランティアなど）、各種サービス（お店など）さまざまな空間（居場所・拠点・通いの場など）、各種ネットワーク、各種制度などいろいろ

るものがあります。

重要なことは、本人が求めるものがあっても、それに合った地域資源と出会えないといけなし、地域資源だけをたくさん羅列しても、それを欲して活用する人に届かないと価値を見出すことができないわけです。つまり、本人が求めるウェルビーイングな日常生活と、これらの地域資源がマッチングしなければ価値は生まれないということです。

この重要な役割を担うのが、生活支援コーディネーター（以下SC）なのです。SCは短期集中サービスを活用される1つのケースと向き合う中で、真の地域資源に対する深掘り、アセットの発見、利活用、開発

をしていくことができます。

生活者である利用者からの情報を互いにシェアする

短期集中サービスを利用して利用者は地域で暮らしている生活者です。地域情報は生活者が一番よく知っているわけ

です。私たちはこのリアル生活者から日常生活における地域情報を集めることにし、それを短期集中サービス内に掲示することになりました。

実際に地域資源の掲示において以下のようなことがあります。運動を行なった後の休憩時

間にチラシと見る。利用者同士掲載されているお店についての情報交換を誰に言われるでもなく行う。そして後日そのお店に通っている人が出てきたりしました。

つまり短期集中サービスどころ・からだ元気になり、つながりが生まれ情報をやりとりするようになることで、自ら社会と再接続する準備活動が行われていたということです。このような自然に自律的となるデザインが短期集中サービスには重要です。



「地元のことば地元の人が知っている」掲示情報で会話がはずむことも